

高西遺跡Ⅲ

第3次調査発掘調査報告書

2025 年 3 月

出雲市教育委員会

序

本書は令和5年度（2023）に出雲市塩冶町で実施した、宅地分譲地造成工事にともなう高西遺跡の埋蔵文化財発掘調査の記録を収録した報告書です。

遺跡名の「高西」は『出雲国風土記』記載の高岸郷の古地名「高岸」から変化した地名とされています。高西遺跡は弥生時代から鎌倉・室町時代にかけての遺跡です。今回の調査では、弥生時代中期から後期頃、飛鳥～奈良時代、平安時代と3時代の遺物が多く確認されています。

調査成果をまとめた本書が、地域の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高め、歴史学習の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にあたりご理解とご協力を賜りました関係者の皆様に対し、厚くお礼申し上げます。

令和7年（2025）3月

出雲市教育委員会

教育長 杉谷 学

例 言

1. 本書は、令和5年度（2023）に出雲市文化財課が実施した、宅地分譲地造成事業にともなう高西遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、令和6年（2024）1月29日～3月29日の期間において実施した。
3. 発掘調査を実施した地番及び面積は、次のとおりである。
島根県出雲市塩冶町字有原 1728 番 2、1729 番 約 300㎡
4. 調査は次の体制で実施した。

＜令和5年度（2023）＞ 現地調査

調査主体	出雲市文化財課		
事務局	森山賢次（出雲市市民文化部長兼文化財課長）		
	三原一将（出雲市市民文化部長文化財課主査）		
	吾郷尚志（	同	課長補佐）
調査員	石原 聡（	同	係長）
	原 俊二（	同	行政専門員）
調査補助員	馬庭範成、多々納達也		
整理作業員	鶴口令子、中島和恵、前島浩子		
発掘作業員	飯塚豊憲、伊藤貴敏、江角和樹、佐々木正、田邊宏行、寄廣和人、渡部和憲		
調査指導	是田 敦（島根県教育庁文化財課 課長補佐）		

＜令和6年度（2024）＞ 報告書作成

調査主体	出雲市文化財課		
事務局	山崎久美子（出雲市市民文化部長文化財課長）		
	三原一将（出雲市市民文化部長文化財課主査）		
	吾郷尚志（	同	課長補佐）
調査員	石原 聡（	同	係長）
	原 俊二（	同	行政専門員）
調査補助員	馬庭範成、多々納達也、高橋智沙都		
整理作業員	鶴口令子、中島和恵、前島浩子		

5. 本書で示した方位は真北を示す。座標は世界測地系第Ⅲ系座標に基づき、標高は海拔高を示す。
6. 本書掲載の遺物実測図については、調査員・調査補助員が作成した。遺物の写真撮影は石原が行った。本書の執筆・編集は、文化財課職員の協力を得て、石原が行った。
7. 本遺跡の出土遺物や実測図、写真は出雲市文化財課で保管している。

凡 例

1. 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。SK—土坑、SD—溝、SE—井戸
2. 本書を作成するにあたり、編年について下記の参考文献を利用した。本文引用時には、略称を用いた。

【編年参考文献】

弥生土器

西岡睦夫・松本岩雄編 1992 『弥生土器の様式と編年』・山陽・山陰編・木耳社

須恵器・土師器

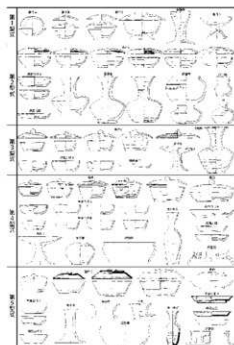
大谷晃二 1994 「出雲地域の須恵器の編年と地色色」『島根考古学会誌』第11号 島根考古学会

島根県教育委員会編 2013 『史跡出雲国府跡—9 総括編—』風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 22

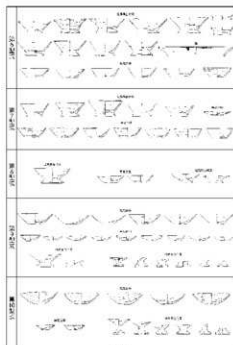
(出雲国府編年)

時期区分の基準資料と指標

暦年代	7C 後葉	7C 末葉～ 8C 第1四半期	8C 第2四半期	8C 第3～ 第4四半期	8C 末葉～ 9C 前半	9C 中葉～ 後葉	10C 前半	10C 後半～ 11C 前半	11C 後半～ 12C 前半	12C 後半
型式名	第1型式	第2型式	第3型式	第4型式	第5型式	第6型式	第7型式	第8型式	第9型式	第10型式



第10-1 出雲国府跡出土須恵器類 (1) (5-11頁)



第10-2 出雲国府跡出土須恵器類 (4) (5-11頁)

(島根県教育委員会編 2013を1:10で転載)

目 次

第 1 章 遺跡の位置と環境	1
第 1 節 地理的環境	1
第 2 節 歴史的環境	1
第 2 章 調査に至る経緯と経過	4
第 3 章 調査の成果	9
第 1 節 調査の概要	9
第 2 節 遺構の概要	9
第 3 節 遺物の概要	10
第 4 章 総括	25
第 1 節 溝 SD3001 について	25
第 2 節 土坑 SK3005 出土の刻書土器について	25
第 3 節 まとめ	27

挿図目次

第 1 図 高西遺跡と出雲平野周辺の主要な遺跡	2	第 13 図 溝 SD3001 最下層 3 層遺物実測図(1)	18
第 2 図 調査区の位置	4	第 14 図 溝 SD3001 の掘下げ状況(北から)	18
第 3 図 調査区の位置と周辺の調査(Tr はトレンチ調査)	5	第 15 図 溝 SD3001 最下層 3 層遺物実測図(2)	19
第 4 図 遺構配置図	6	第 16 図 溝 SD3001 最下層 3 層遺物実測図(3)	20
第 5 図 試掘トレンチ(北壁)断面図	6	第 17 図 溝 SD3001 最下層 4 層・南サブトレンチ 遺物実測図	21
第 6 図 溝 SD3001 遺構平面図	10	第 18 図 井戸 SE3003 平面図	22
第 7 図 溝 SD3001 土層図	11	第 19 図 井戸 SE3003 遺物実測図	22
第 8 図 溝 SD3001 上層・中層遺物実測図	12	第 20 図 土坑 SK3002・溝 SD3004・土坑 SK3005 平面図・断面図・遺物実測図	23
第 9 図 溝 SD3001 下層遺物実測図	14	第 21 図 2 層黒色土(遺物包含層)遺物実測図	24
第 10 図 溝 SD3001 最下層 1 層遺物実測図	15	第 22 図 遺跡周辺の標高図	26
第 11 図 溝 SD3001 最下層 2 層遺物実測図(1)	16	第 23 図 遺跡周辺図	27
第 12 図 溝 SD3001 最下層 2 層遺物実測図(2)	17		

写真図版目次

図版1 調査前・1区

図版2 2区全景

図版3 SD3001 (1)

図版4 SD3002 (2)・SK3002

図版5 SE3003・SD3004

図版6 SK3005・発掘調査の状況

図版7 SD3001 土師器・石器・金属関連

図版8 SD3001 須恵器・土師器

図版9 SD3001 須恵器・弥生土器

図版10 SD3001 土師器・弥生土器・須恵器・
・・・・石製品

図版11 SE3003 SD3004 SK3005 須恵器・
弥生土器・土師器・金属関連

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

高西遺跡は出雲市塩冶町字有原に所在し、JR 出雲市駅の南西約 1.0km、出雲平野のほぼ中央部に位置する。出雲平野は東側を宍道湖、西側を日本海、南側を中国山地、北側を島根半島に囲まれた東西約 20km、南北約 5 km にわたる沖積平野である。平野は斐伊川と神戸川が運んだ土砂により形成され、現在では斐伊川は宍道湖に、神戸川は日本海に注いでいる。かつての平野西部には、大きな潟湖が広がっており、斐伊川と神戸川の両河川が流れ込んでいた。高西遺跡は潟湖に注ぎ込む神戸川北岸の標高約 8 m の微高地上に位置していたと考えられる。

第2節 歴史的環境

今回の高西遺跡の調査成果については、第3章で詳しく述べるが、弥生時代中期から後期を中心とした弥生土器、古墳時代から平安時代の須恵器、土師器を確認し、当地における人々の活発な活動の一端が明らかになった。本節では、鎌倉・室町までの出雲平野における人々の活動の様相を概観する(第1図)。

縄文時代

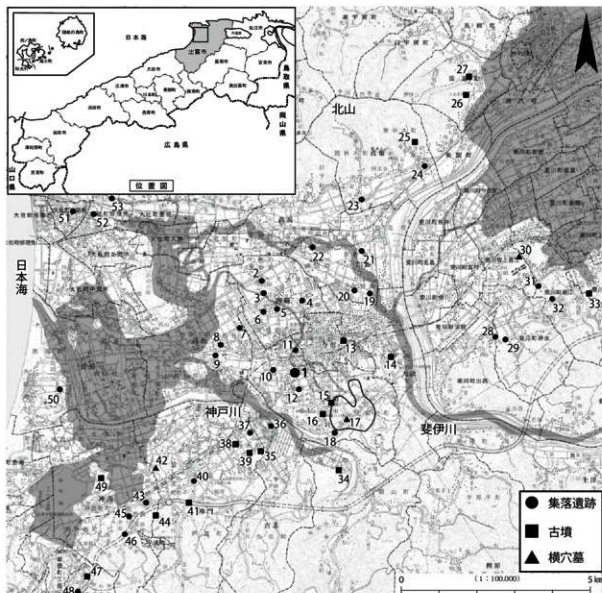
出雲平野において、人間の活動が確認されているのは縄文時代早期からで、押型文土器が出土した山持遺跡(23)などが知られ、海進により広がった内湾(古宍道湖)沿岸で人々は生活していたとみられる。後・晩期になると海退が進み、高西遺跡の北約 3 km の矢野遺跡(2)や蔵小路西遺跡(5)など平野の中央部にも遺跡が広がるようになる。

弥生時代

弥生時代前期には、矢野遺跡や山持遺跡などで縄文時代から継続して集落が形成される。中期以降、出雲平野の各所で急速に集落が発達し、大規模な遺跡群を形成するようになる。本遺跡も含まれる天神遺跡(10)を中心とした天神遺跡群、青木遺跡(24)を中心とした美談遺跡群、白枝荒神遺跡(7)や白枝本郷遺跡(8)を中心とした白枝遺跡群、古志本郷遺跡(36)や下古志遺跡(37)を中心とした古志遺跡群、中野清水遺跡(19)や中野美保遺跡(20)を中心とした中野遺跡群などが挙げられる。後期になると、平野南部の西谷墳墓群(14)で大型の四隅突出型墳丘墓が築かれるようになる。また、破鏡やガラス玉といった舶載品が出土した白枝荒神遺跡をはじめ、平野の各遺跡でも西日本の各地域や大陸との交流がうかがえる遺物が出土し、広域での活発な交流や出雲平野の勢力拡大を物語る。

古墳時代

古墳時代前期から中期にかけて、四路遺跡群や古志遺跡群、白枝遺跡群、天神遺跡群といった平野部の各遺跡群では遺物の出土量が急激に減少することから、何らかの理由で衰退したと考えられる。墳墓に関しても、弥生時代後期の西谷墳墓群に続くような大規模な古墳は見当たらない。前期後半に



※網掛け部分は弥生時代の推定水域

1. 高西遺跡 2. 矢野遺跡 3. 小山遺跡 4. 姫原西遺跡 5. 蔵小路西遺跡 6. 渡橋沖遺跡 7. 白枝荒神遺跡
8. 白枝本郷遺跡 9. 余小路遺跡 10. 天神遺跡 11. 海上遺跡 12. 神門寺付近遺跡 13. 今市大念寺古墳
14. 西谷墳墓群 15. 上塩治薬山古墳 16. 上塩治地蔵山古墳 17. 上塩治横穴墓群 18. 三田谷Ⅰ遺跡
19. 中野清水遺跡 20. 中野美保遺跡 21. 荻野Ⅱ遺跡 22. 高岡遺跡 23. 山持遺跡 24. 青木遺跡 25. 大寺Ⅰ号墳
26. 上島古墳 27. 国富中村古墳 28. 後谷遺跡 29. 小野遺跡 30. 平野横穴墓群 31. 杉沢遺跡 32. 三井Ⅱ遺跡
33. 結古墳群 34. 刈山古墳群 35. 放れ山古墳 36. 古志本郷遺跡 37. 下古志遺跡 38. 宝塚古墳 39. 妙蓮寺山古墳
40. 浅柄遺跡 41. 浅柄Ⅱ古墳 42. 神門横穴墓群 43. 九景川遺跡 44. 北光寺古墳 45. 中上Ⅱ遺跡 46. 麓Ⅱ遺跡
47. 常楽寺柿木田Ⅰ号墳 48. 京田遺跡 49. 山地古墳 50. 上長浜貝塚 51. 鹿蔵山遺跡 52. 原山遺跡 53. 菱根遺跡

第1図 高西遺跡と出雲平野周辺の主要な遺跡

なると、出雲平野における最古の前方後円墳とされる大寺Ⅰ号墳(25)が北山山麓に築かれる。前期後半から中期前半になると、平野南部の丘陵地帯で浅柄Ⅱ古墳(41)や山地古墳(49)、常楽寺柿木田Ⅰ号墳(47)、北光寺古墳(44)といった有力な古墳が多く築かれる。後期になると、平野南部の三田谷Ⅰ遺跡(18)や九景川遺跡(43)のほか、平野部の各遺跡で再び集落形成が活発になる。集落の隆盛に呼応するように後期後半以降、古墳の築造も盛んになる。神戸川東岸の今市町や塩治町周辺

では、出雲最大の前方後円墳である今市大念寺古墳（13）のほか、上塩冶築山古墳（15）や上塩冶地蔵山古墳（16）といった、大型の横穴式石室をもつ古墳が築造される。これらの古墳は出雲西部の首長層が葬られたと考えられる。

神戸川西岸の古志町周辺でも、妙蓮寺山古墳（39）や放し山古墳（35）、宝塚古墳（38）といった、横穴式石室をもつ有力な古墳が確認されている（山本1964）。また、後期後半以降、上塩冶横穴墓群（17）や平野横穴墓群（30）神門横穴墓群（42）といった横穴墓も出雲平野周辺で多く築かれている。

古代（奈良・平安時代）

奈良時代は、『出雲国風土記』の記述から、この時代の様子を知ることができる。それによると、現在の出雲地域は、4つの郡（出雲郡、神門郡、橋縫郡、秋鹿郡）にまたがる。当地域は、神門郡に属する。高西は風土記記載の高岸郷の古地名「高岸」から変化した地名とされる。神門郡家推定地とされる古志郡推定地とされる古志本郷遺跡（36）では、多数の大型建物が確認されている。また、天神遺跡、三田谷Ⅰ遺跡、鹿蔵山遺跡、青木遺跡からは、官衙施設関連の遺構や遺物がみついている。このほか、古代寺院跡の神門寺境内廃寺、長者原廃寺では、瓦の出土や基壇等が確認されている。

中世（鎌倉・室町時代）

高西遺跡周辺は、鎌倉時代、出雲守護に補せられた佐々木義清の孫頼泰が塩冶氏と称した。出雲平野での勢力を広げた塩冶氏の本拠とされる地域であることから、城や館などの関連する遺跡が点在する。

塩冶氏の城跡は、向山城跡、半分城跡が候補地である。館跡は、築山遺跡内、土塁が今も残る浄音寺にある伝塩冶氏館跡などが想定されている。

築山遺跡からは、発掘調査により13～16世紀の陶磁器や館に関わる遺構が発見されている。

近世（戦国・江戸時代）・近代

斐伊川の東流は、出雲平野東部の平野の拡大を進めた。しかし、湿地帯が多く、大量の土砂の流入は河川の氾濫を頻発させたため、堤防工事や川の付け替え（川違え）などの治水工事に共に新田開発が進む。塩冶では、神戸川の築堤により農業用水が不足し一時は不毛の地となったが、高瀬川や間府川などの開削によって、斐伊川からの用水供給により、豊かな土地となり現在に至る。

参考文献

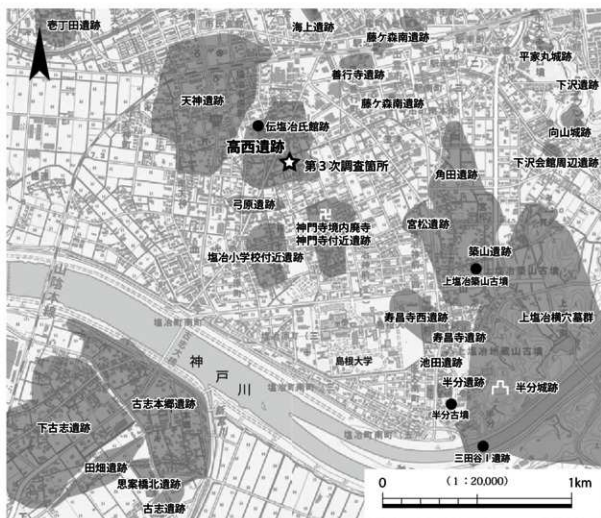
出雲塩冶誌編集委員会 2009 『出雲塩冶誌』

出雲市教育委員会 1997 『遺跡が語る古代の出雲—出雲平野の遺跡を中心として』

第2章 調査に至る経緯と経過

令和3年(2021)8月11日に高西遺跡の埋蔵文化財の照会を受けた。集合住宅の設計が決まり次第、対象地を範囲確認調査することとなり、令和3年(2021)9月10日に実施した(試掘調査結果については後述する)。範囲確認調査の結果、17ヶ所で設定したトレンチのうち、事業地内西側を中心に遺構・遺物を確認した。その結果をもとに事業者と協議し、市道が拡幅となる300mについて、本発掘調査を実施することとなった(第3図)。なお、高西遺跡での発掘調査は、平成23年(2011)、平成29年(2017)に市道(医大前新町線)改良工事に伴って第1次、第2次の本発掘調査を実施している。今回の調査地点は2次調査の調査地から西へ100mの位置にあり、遺跡の南東部に位置する。

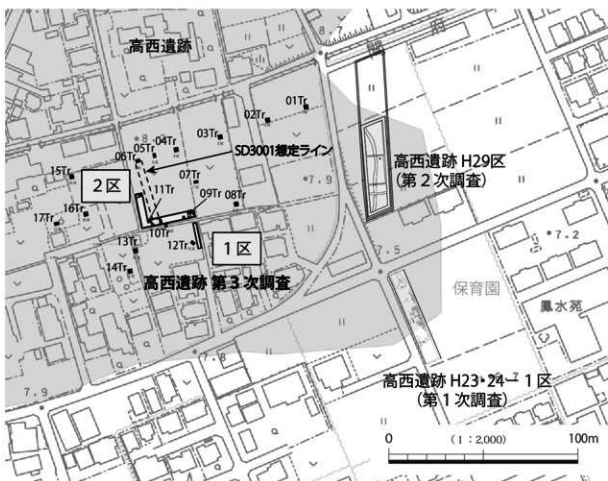
令和6年(2024)1月29日に重機を用いて表土層等を除去し、1月30日より人力による発掘を開始した。遺構面を精査し、確認した遺構は掘り下げて写真、図面による必要な記録を行い、3月29日に調査を終了した。



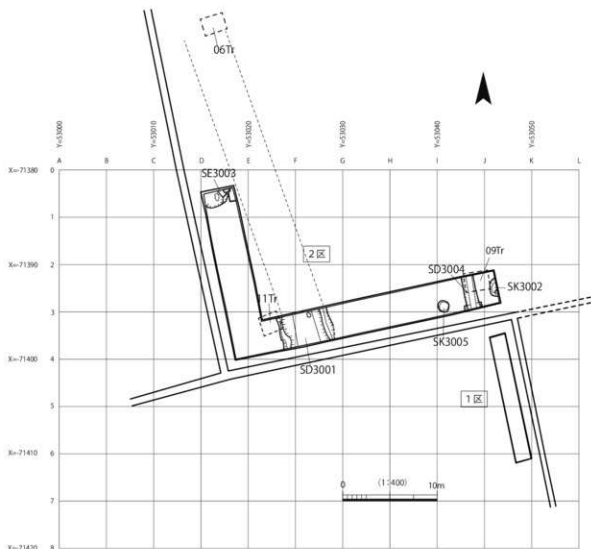
第2図 調査区の位置

<事務手続き>

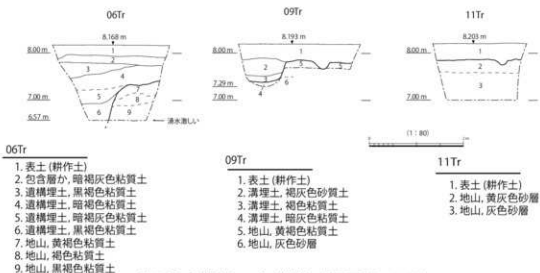
- 令和5年12月28日 事業者より島根県教育委員会へ、文化財保護法第93条第1項により埋蔵文化財発掘の届出を提出。
- 令和6年 1月 5日 島根県教育委員会より事業者へ、市道拡幅部分300mについては発掘調査を行うよう指示。
- 1月18日 出雲市教育委員会から島根県教育委員会へ、文化財保護法第99条第1項により埋蔵文化財発掘調査の通知を提出。
- 3月29日 出雲市教育委員会から出雲警察署長へ、埋蔵物発見届を提出。
- 3月29日 出雲市教育委員会から島根県教育委員会へ、遺物保管証を提出。
- 3月29日 出雲市教育委員会から島根県教育委員会へ、遺跡の取扱いについて意見書を提出。
- 4月12日 島根県教育委員会から出雲市教育委員会へ、埋蔵物の文化財認定及び帰属の通知。
- 4月19日 島根県教育委員会から出雲市教育委員会へ、遺跡の取扱いに関する意見書の回答。



第3図 調査区の位置と周辺の調査 (Trはトレンチ調査)



第4図 遺構配置図



第5図 試掘トレンチ (北壁) 断面図 (S = 1 : 80)

＜既往の調査について＞

高西遺跡は、1970年代にその存在が確認されているものの、本格的な発掘調査は2011年まで行われておらず、昭和62年（1987）に実施した出雲市教育委員会による分布調査（註1）や同年度に実施された田中義昭氏（島根大学、当時）らによる分布調査等（註2）で採集された弥生土器、土師器、須恵器片等によって時期と範囲が推察されているのみであった。

その後、塩冶町から今市町を南北につなぐ約1.5kmの都市計画道路として出雲市が計画する市道（出雲市都市計画道路医大前新町線）の工事に伴って1次及び2次の2箇所での発掘調査を出雲市が実施している（註3）。

1次調査は、2011年に、400㎡を発掘調査している。中世以降の溝、畝状遺構が確認でき、須恵器、土師器、陶磁器類、宋銭「祥符元寶」（1008年初鑄）が出土している。その後、2次調査報告書で、畝状遺構については、道路遺構にしばしばみられる南北の波板状凹凸面の可能性があると報告している。

2次調査は、1次調査より北へ約30mのところを2017年から2018年に610㎡を調査した。南北の溝2条と土坑1基の遺構を確認し、遺物は弥生土器、石器、土師器、須恵器、陶磁器、種子札などが出土している。

いずれの調査区も微高地の高西集落から離れた縁辺部である。遺跡の性格の解明は今後の課題である。本報告も1次調査・2次調査の場所から比較的近く、縁辺部である可能性が高い。

＜試掘調査の成果＞

出雲市塩冶町字有原1729番地外において宅地造成が計画され、令和3年（2021）8月11日に、出雲市文化財課へ周知の埋蔵文化財包蔵地に該当しているか照会依頼があった。確認の結果、事業地が高西遺跡に該当していたため、文化財保護法に基づく手続きが必要であることを伝達し、事前協議を開始した。同日中に現地確認をおこない、調査依頼書・同意書を送付した。8月24日には計画図面、調査依頼及び地権者の同意書を受理した。これを受けて、8月26日に埋蔵文化財発掘調査を実施する旨を県教委に通知し、9月10日に現地調査を行った。

なお、本事業は国庫補助事業の市内遺跡確認調査事業として実施し、調査後、9月14日に事業者の結果報告をおこなった。また、出土遺物については、同日に埋蔵文化財発見届を出雲警察署長に提出、埋蔵文化財保管証を県教委に提出している。

事業予定地は東側が水田、西側が畑地である。現在耕作されておらず、支障物件等もなかった。地表面には土器細片が散布している状況であった。また、東側水田と西側畑地の間には約60cmの高低差があり、畑地が遺跡の中心に当たる可能性が当初から想定されていた。

調査は西側畑地から開始した。調査は試掘06トレンチ（以後Tr略す）・11Tr・8Tr・3Trの順でおこない、6Tr・8Trで遺構を確認したため4Tr・9Trを追加した。地山の質の変化が著しいことから、さらに5Tr・7Tr・10Trを追加して畑地の調査を完了した。東側水田は2Tr・1Trの順で実施し、約1m掘り下げたところで湧水が激しく、それ以上の掘り下げを中止した。以上、11区の調査区により、事業地における埋蔵文化財の状況を確認した。

東側水田に設定した 1・2 Tr は耕土・自然堆積層を経て、褐色砂礫層に至る。しまりが強く、地山の可能性がある。遺構・遺物は確認できず、褐色砂礫層からの湧水が激しく、これ以上の掘り下げを断念した。なお、2 Tr の自然堆積層は西に向かって緩やかに傾斜している状況であった。

西側畑地に設定した 3 Tr は、耕土、自然堆積層を経て、地山に至る。2・4 層は緩やかに東に向かって傾斜していた。微細な遺物を含む。土層の様相は 1・2 Tr に似る。

4・11 Tr は、耕土直下で地山もしくは遺構面に当たる点で共通しており（6 区 Tr2 層のみ遺物包含層）、6 Tr・8 Tr・9 Tr において遺構を確認した。遺構としては、溝（6 Tr・9 Tr）、ピット及び不明遺構（8 Tr）がある。その他、11 Tr で東西方向に延びる落ち込みがあるが、遺構かどうかは不明である。また、6 Tr では須恵器・土師器が比較的多く出土した。地山は 4 Tr・6 Tr・7 Tr・8 Tr・9 Tr が黄褐色系の粘質土、5 Tr・10 Tr・11 Tr は砂であり、変化がある。

東側水田では、遺構・遺物ともに確認できなかった。一方、西側畑地では遺構・遺物、地山を確認し、埋蔵文化財が良好な状態で保存されていることが明らかになった。また、3 区の土層は 1・2 Tr の様相に酷似しており、3 区と 4 区の間で微高地が傾斜しているものと考えられる。

その後、事業者より事業範囲を拡大したいため、拡大予定部分における追加調査についての依頼が口頭であった。現地確認の上、10 月 29 日に調査計画を示した。11 月 15 日には調査依頼及び地権者の同意書を受理した。12 月 2 日に現地調査をおこなった。調査区は 6 か所を設定した。12～14 Tr の GL はほぼ同じである。調査の結果、12 Tr では GL-30cm で遺構面に達するものの、13 Tr・14 Tr と順に遺構面が傾斜していることが明らかになった。12 Tr では比較的しっかりした溝状の落ち込みがあった。主軸はほぼ南北方向である。13 Tr では複数の遺構が確認でき、埋土は 2 色（灰色・褐灰色）に分かれる。遺構の時期差を示している可能性が高い。14 Tr では耕土と同色の溝が確認できた。

15～17 Tr の GL は、12～14 Tr より 50cm 以上高い。遺構面もしくは遺物包含層上面の標高は 17 Tr に向かって高くなる。15・17 Tr では遺構が確認された。

註1 出雲市教育委員会 1987 『塩冶地区遺跡分布調査報告』Ⅱ

註2 田中義昭・西尾克己 1988 「出雲平野における原始・古代集落の分布について」『山陰地域研究』第4号 鳥根大学山陰地域研究総合センター

註3 出雲市教育委員会 2013 『神門寺付近遺跡Ⅲ・高西遺跡』出雲市の文化財報告 23
出雲市教育委員会 2019 『高西遺跡Ⅱ』出雲市の文化財報告 40

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

工事予定範囲のうち、遺跡への影響が大きいと判断した市道拡幅部分、約300mを対象に発掘調査を実施した。調査は重機を用いて耕作土を除去したあと、人力で遺構面まで掘り下げた。遺構面を精査して確認した遺構は掘下げて状況を確認し、必要な写真、図面などの記録をとった。また、調査区には世界測地系第Ⅲ系座標に基づいて、40×55mのグリッドを設定した。グリッドはX=-71380、Y=53000の交点を基点として、5m間隔のグリッドを設けた。南に向けてアラビア数字(0、1、2・・・)を、東に向けてアルファベット大文字(A、B、C・・・)を付与した。グリッドの名称については、北西隅の交点の番号を基準とした(第4図)。遺構の位置については、グリッドを基準として記録した。遺物は基本的に遺構ごとに取り上げ、遺構外から出土したものについては、グリッドごとに取り上げた。

基本的な層序は上から1層：耕作土、2層：黒色土(遺物包含層)、3層：灰黄褐色砂質土(地山・遺構基盤上層)、4層：灰色砂質土(地山・遺構基盤層下層)の順である。

第2節 遺構の概要

1区では、後世の擾乱跡などにより、明確な遺構は確認できなかった。

2区では、下記の遺構を確認している。

溝 SD3001 (第6・7図・図版3・4)

上面検出面で幅5.5mで、底面で幅2.0mの断面逆台形で、調査区の幅3.5m分を確認している。南北に走る溝である。先行して南壁際を掘削し(南側サブトレンチ)、便宜的に上層・中層・下層にわけて掘り下げた。上層・中層・下層とも土師器、須恵器が出土した。足高台付の土師器が特徴的であり、出雲国府第6～8型式の土器と考えられる。時期は9世紀中葉から11世紀前葉と平安時代の土器であり、溝の埋没時期も11世紀以降と考えられる。

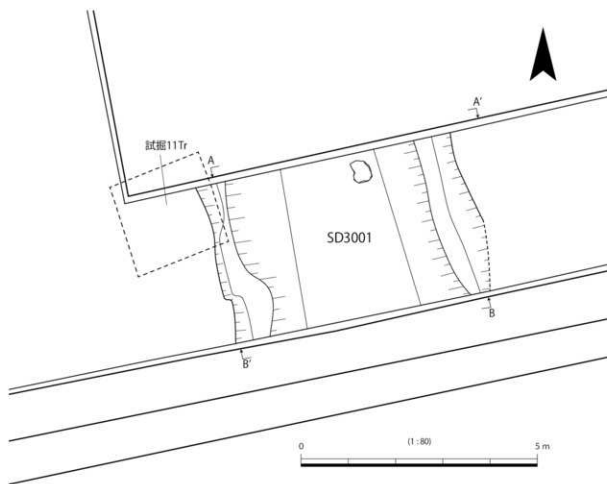
その後確認した最下層では、土師器(足高台付)は出土せず、古代の須恵器とともに弥生土器が出土した。最下層3層から須恵器の高台付が出土している。杯蓋Cの杯身であり、出雲国府第3型式である。8世紀第2四半期ごろ埋没したと推定される。

土坑 SK3002 (第20図・図版4)

上面の直径約2.0m、深さ約0.5mで、楕円形の土坑である。埋土からは土師器破片が出土した。

井戸 SE3003 (第18図・図版5)

上面の直径約2.0m、深さ約1.0mで、円形の井戸である。井戸枠などは確認していない。埋土からは弥生土器、須恵器、土師器、備前焼などの陶磁器類が出土した。



第6図 溝 SD3001 遺構平面図

溝 SD3004 (第20図・図版5)

上面検出で幅 1.3m、深さ約 0.4 mで、調査区の幅 3.5m 分を確認している。南北に走る溝である。埋土からは、土師器、陶磁器類が出土した。

土坑 SK3005 (第20図・図版6)

上面検出では、直径 1.1 m、深さ約 0.4 m円形の土坑である。埋土からは土師器が出土した。足高台付の環で国府第6型式から8型式に入るものである。底部に「有興」の刻書がある。

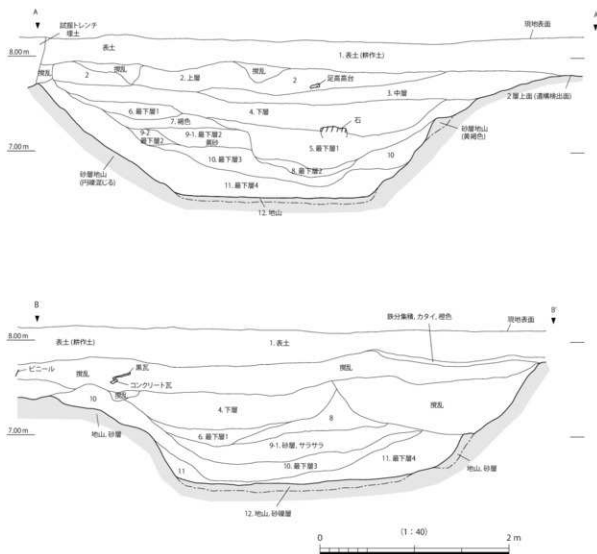
第3節 遺物の概要

1 遺構内出土遺物

部位の特定や図化が可能だった遺物のうち、特徴的な遺物や遺存状態の良い遺物について、遺構ごとに詳述する。

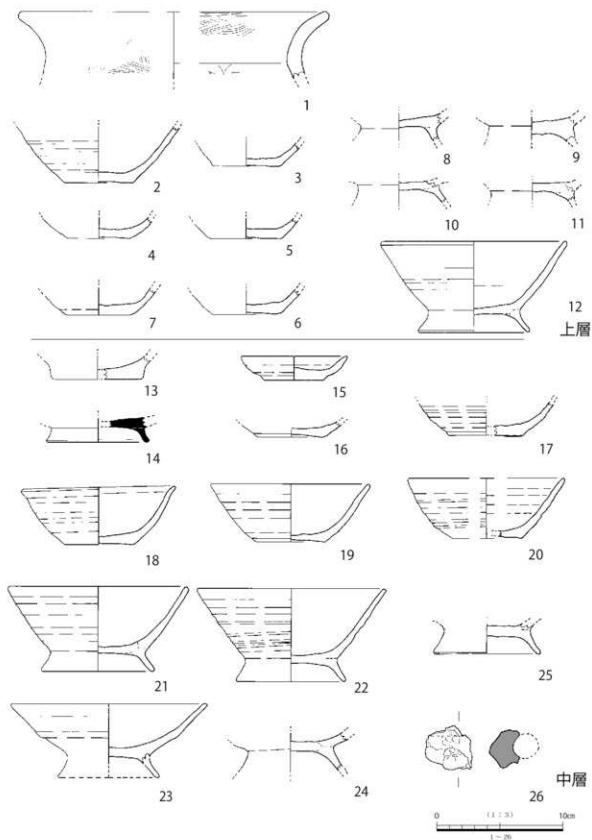
溝 SD3001 出土遺物 (第8図～第17図)

第8図は、遺構上層の出土遺物である。1は土師器甕の口縁部である。2から12は、土師器の環である。2から6は出雲国府第6型式(9世紀中葉から後葉)に該当し、7は出雲国府第7型式(10



- 註記
1. 表土
2. 上層 1.5m 深い赤褐色土、1cm程度の白色砂粒含む、やや粘性あり、しまる、弥生～土師器の遺物含む、炭化物多く含む
3. 中層 1.5m 深い赤褐色土、やや粘性あり、しまる、弥生～土師器の遺物含む、炭化物若干含む
4. 下層 灰褐色土、やや粘性あり、しまる、弥生～中世土師の遺物含む、炭化物若干含む
5. 最下層 1. 暗赤褐色土、粘性あり、しまる、弥生～古代 (須恵器) の遺物含む
6. 最下層 2. 灰褐色土、粘性あり、しまる、弥生～古代 (須恵器) の遺物含む
7. 褐色土、しまる、弥生～古代 (須恵器) の遺物含む
8. 1.5m 深い褐色土、砂質、褐色土と混じる、弥生～古代 (須恵器) の遺物含む
9. 最下層 2. 褐色土、砂質、しまりやや弱い、弥生～古代遺物含む
9. 2. 最下層 2. 1.5m 深い褐色土、砂質、しまりやや弱い、弥生～古代遺物含む
10. 最下層 3. 褐色土、砂質、しまりやや弱い、弥生～古代遺物含む
11. 最下層 4. 褐色土、砂質、しまりやや弱い、弥生～古代遺物含む
12. 地山、砂礫層、円礫含む、遺物なし

第7図 溝SD3001土層図



第8図 溝SD3001上層・中層 遺物実測図

世紀前半)である。8から12は、足高台の付く環である。8から11は、全体の器形がわからず、国府第6から8型式に入るものである。12は出雲国府第7型式である。

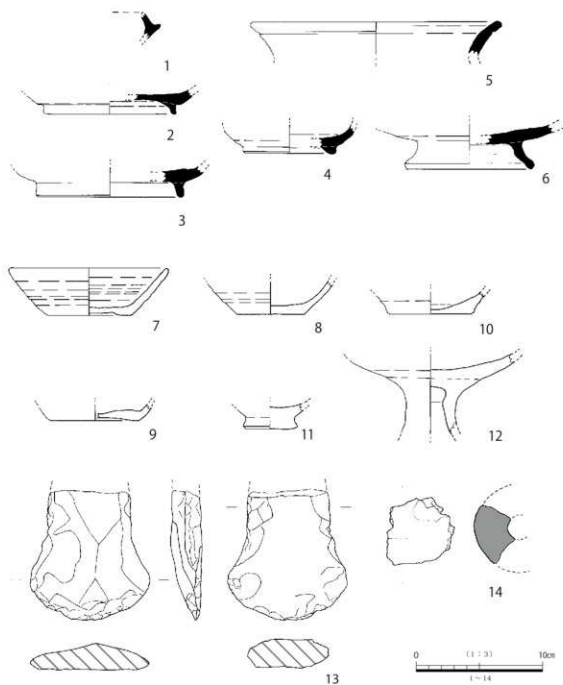
13～26は遺構中層の出土遺物である。13は弥生土器底部である。中期以降であろう。14は須恵器の高台付環である。内面平滑であり、転用硯の可能性がある。15から25は、平安期を中心とする土師器である。15は皿で出雲国府第9型式である。16から19は無高台の環で、16は出雲国府第9型式である。17は第8型式である。18、19は第9型式である。21から25は高台付の環で21・22は第7型式、23は第8型式、24、25全体の器形がわからず、国府第6から8型式に入るものである。26は、ふいごの羽口で口径は約2cmである。

第9図は遺構下層の出土遺物である。1から6は須恵器である。1は蓋環の身口縁部分であり大谷分類のA6型、出雲4期である。2から4は高台付の環である。5は壺の口縁、6は壺の底部である。7から12は土師器、7から10は環で7、8は出雲国府第6型式、9は第7型式、10は第9型式、11は柱状高台付環で第9型式、12は高環である。13は、石器の打製石鏃で安山岩製である。14は、ふいごの羽口で口径は約2cmである。

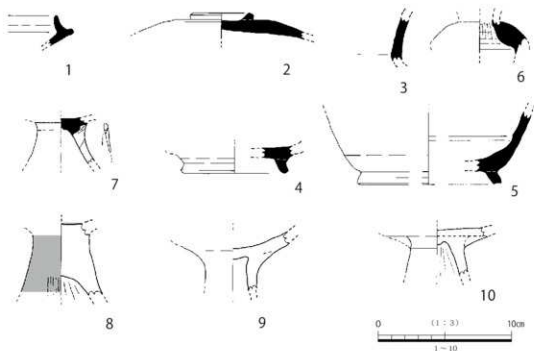
最下層は、4層に分層している。最下層は、上・中・下層よりも古く、出雲国府第3型式までで収まる。最下層1層は第10図である。1から7は須恵器である。1は蓋環の身口縁部分であり大谷分類のA6型、出雲4期である。2は蓋環Cの蓋で出雲国府第2型式である。3は壺の頸部、4は壺の底部である。内面が平滑で、転用硯の可能性がある。5は、壺底部である。6は甕の肩部で内面に較り目が残る。7は高環の脚部で2方向透かしが残る。8から10は土師器の高環脚部である。8の外面は赤色塗彩されている。

第11・12図は、最下層2層出土遺物である。第11図は、須恵器である。1から5は蓋環の蓋で1は大谷分類A3型、出雲3期である。2は大谷分類A6型、出雲6期である。3は口縁端部にかえりの付く出雲国府第1型式、4は輪状つまみのつく国府第1型式から2型式であろう。5は扁平な宝珠つまみのつく国府第5型式である。6、7は蓋環の身で大谷分類A6型、出雲6期である。8は口縁端部の屈曲する国府第2型式であろう。9、10は高台付の環で国府第2型式である。11は高台付皿Aで国府第4型式である。12は壺の口縁部である。13は長頸壺の頸部である。14は壺の底部である。15、16は、平瓶の肩部で円形浮文を貼り付けている。大谷分類のC2型式で、出雲4期である。17は甕の胴部であり、18は甕の底部である。19は鉢の口縁部である。第12図の1から6は弥生土器である。1、2は口縁部が朝顔状に広がる広口壺の口縁部で弥生中期である。3は口縁部内・外面ヨコナデの複合口縁で弥生時代終末期から古墳前期である。4は把手付短頸壺の把手部分である。5、6は甕の底部である。7はカマドの底部分である。8、9は土師器の高環で8は、内・外面ともに赤色塗彩されている。10は土師器甕の口縁部である。

第13図から第16図は、最下層3層出土遺物である。第13図は、須恵器である。1は高台付の環である。2は高台付環である。環蓋Cの環身であり、国府第3型式である。3は広口壺の頸部から肩部である。4は横瓶で頸部から底部である。第15図1は縄文後期前葉の深鉢である。底部外面に沈線文がめぐる。2から13は弥生土器である。2は中期の甕口縁部である。3は甕の口縁部である。



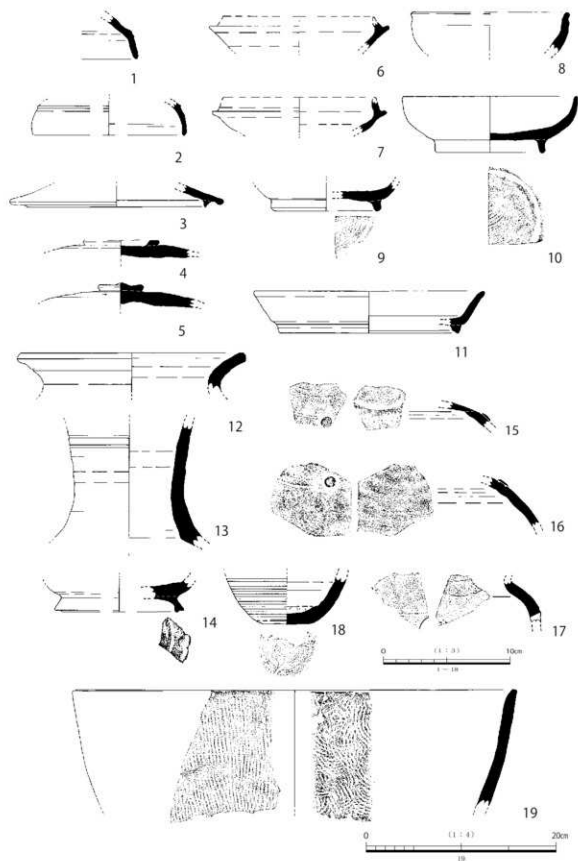
第9図 溝SD3001下層 遺物実測図



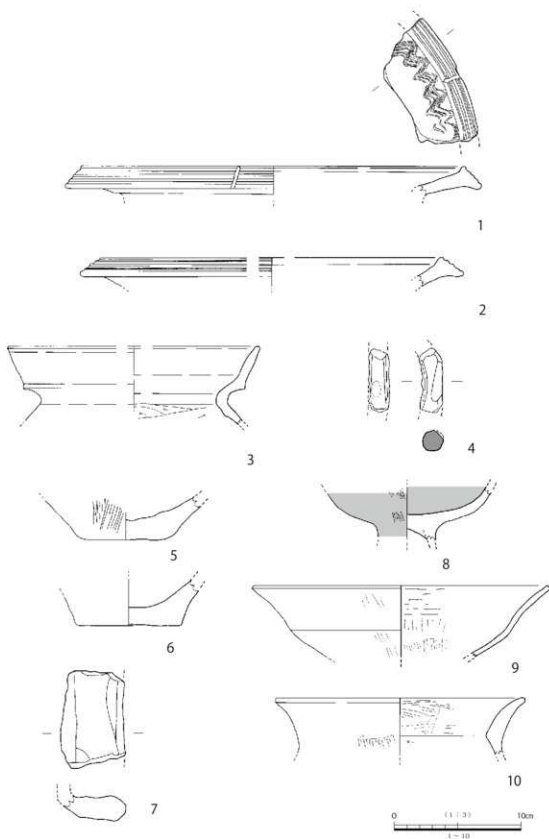
第10図 溝SD3001最下層1層 遺物実測図

口縁端部から1 cm下に3 mm程度穿孔している。4も甕の破片である。外面に2条の突帯文とその間に櫛描波状文がある。5は口縁部が朝顔状に大きく開く広口壺である。6、7は甕である。6は口縁部が「く」の字状に屈曲し、口縁端部は粘土を貼り付けて拡張している。口縁端部には凹線文が施してある。7は、屈曲部に突帯が巡り、指頭による圧痕文が施されている。8は高環である。椀状の環の口縁端部に粘土を貼り付けて拡張したものである。口縁端部上面には凹線文が巡る。9から13は後期の土器である。複合口縁をなす甕の口縁部片である。第16図も弥生土器である。1は甕胴部破片である。外面に羽状文や沈線文がみられる。2は土器の胴部破片を紡錘車に転用しようとした未成品か。中央に直径4 mmほどの円形のくぼみがある。3から6は甕の底部である。中期以降であろう。6は底部に直径6 mmの円孔がある。7は鼓形器台の器受部口縁部である。8は低脚環で、内・外面ヘラミガキが残る。9は高環の脚部である。内・外面赤色塗彩されている。10は甕形土器の把手である。

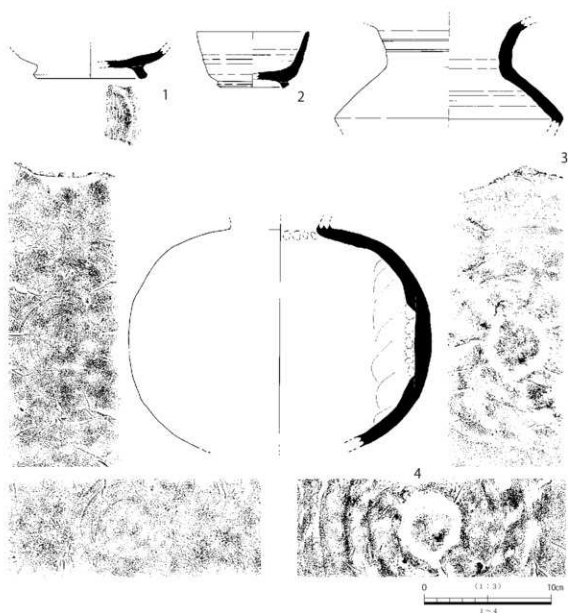
第17図は、最下層4層の土器及び遺構内南サブトレンチの出土遺物である。1は須恵器の高環の底部である。2から4は、後期の土器である。複合口縁をなす甕の口縁部片である。5は甕の底部である。中期以降であろう。6は高環の脚部である。外面脚部に凹線文が4条めぐり、7は弥生土器で複合口縁をなす甕の口縁部片である。外面に櫛描波状文がめぐり、8、9は土師器の環である。出雲国府第9型式である。10は土製支脚の脚部である。11から15は須恵器である。11「は扁平な宝珠つまみのつく国府第5型式である。12は無高台環Aで出雲国府第2型式である。13は高台付の環である。14は長頸壺の頸部である。2条の沈線文がめぐり、15は甕の頸部である。16は有孔土鍾である。17は石器の磨石で石材はデイサイトである。18は椀形の鉄滓である。



第11図 溝SD3001最下層2層 遺物実測図(1)



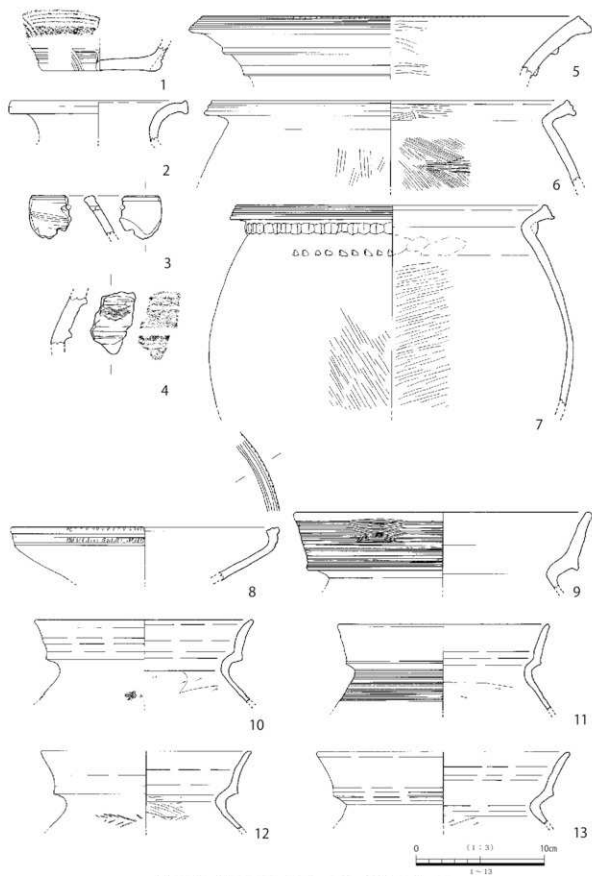
第12図 溝SD3001 最下層2層 遺物実測図(2)



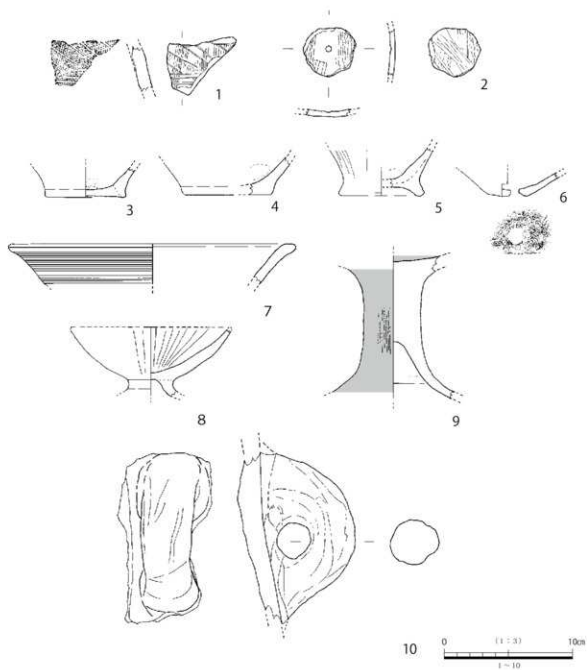
第13図 溝SD3001 最下層3層 遺物実測図(1)



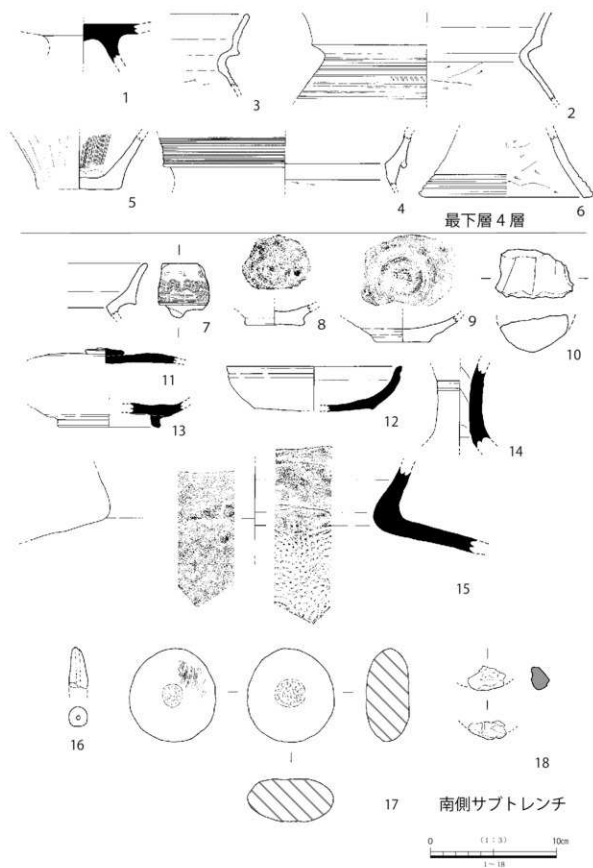
第14図 溝SD3001の掘下げ状況(北から)



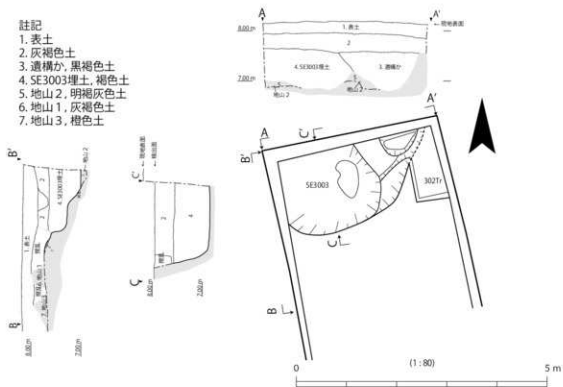
第15図 溝SD3001 最下層3層 遺物実測図(2)



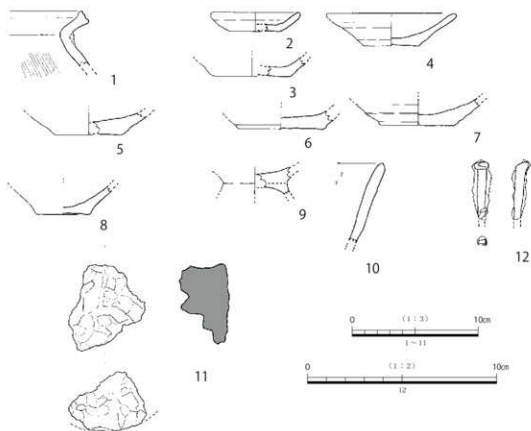
第16図 溝SD3001最下層3層 遺物実測図(3)



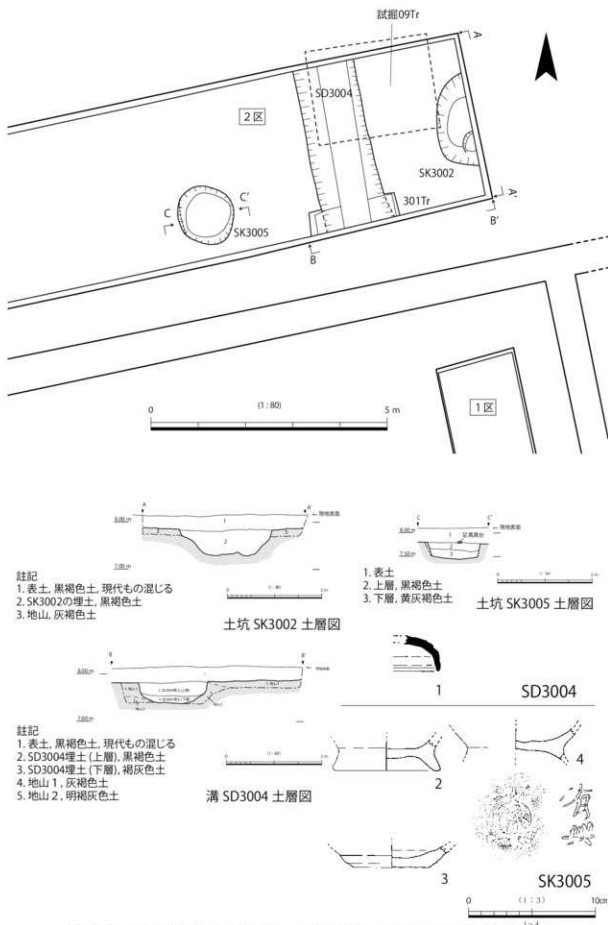
第17図 溝SD3001 最下層4層・南側サブトレンチ 遺物実測図



第18図 井戸SE3003 平面図・断面図



第19図 井戸SE3003 遺物実測図



第20図 土坑 SK3002・溝 SD3004・土坑 SK3005 平面図・断面図・遺物実測図

土坑 SE003 出土遺物 (第 19 図)

1 は弥生土器の甕である。口縁部が「く」の字状に屈曲し、口縁端部には凹線文が施してある。屈曲部に突帯が巡り、指頭による圧痕文が施されている。2 から 10 は土師器である。2 は皿、3 から 8 は坏で出雲国府 10 型式のものである。9 は足高台付の坏で全体の器形がわからず、国府第 6 から 8 型式に入るものである。10 は鉢である。11 は、碗形の鉄滓である。12 は鉄釘で角釘である。

溝 SD3004 (第 20 図)

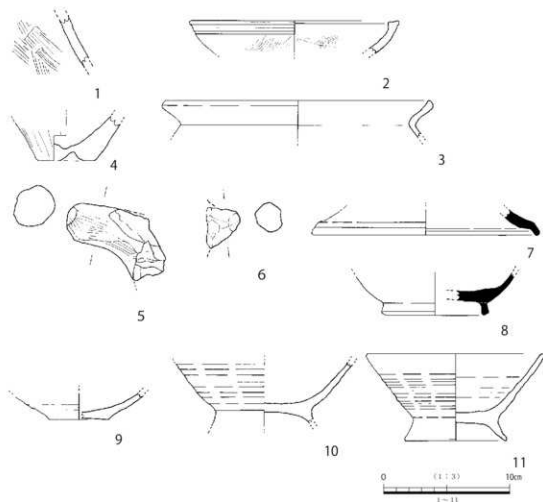
1 は須恵器で蓋環の蓋である。大谷分類 A 5 型から A 7 型に該当する。出雲 4 期から 5 期である。

土坑 SD3005 (第 20 図)

2 は弥生土器の底部である。3 は土師器の坏である。4 は、土師器、足高台付の坏で全体の器形がわからず、国府第 6 から 8 型式に入るものである。底部にヘラ状工具による「有興」の刻書がある。

遺物包含層 2 層黒色土中 (第 21 図)

1 から 4 は弥生土器である。1 は、甕胴部の破片で、櫛描の波状文や直線文、凹線文がある。2 は高坏であり、外面に凹線文がある。3 は、甕の口縁部で「く」の字状に屈曲する。4 は、底部である。5 は、土製支脚の突起部である。6 は、甕の把手である。7、8 は須恵器で、7 は蓋環の蓋、8 は高台付の坏である。9 から 11 は土師器である。9 は坏で出雲国府第 9 型式である。10、11 は足高台付の坏で 10 は、国府第 6 から 8 型式、11 は国府第 7 型式のものである。



第 21 図 2 層黒色土 (遺物包含層) 遺物実測図

第4章 総括

第1節 溝 SD3001 について

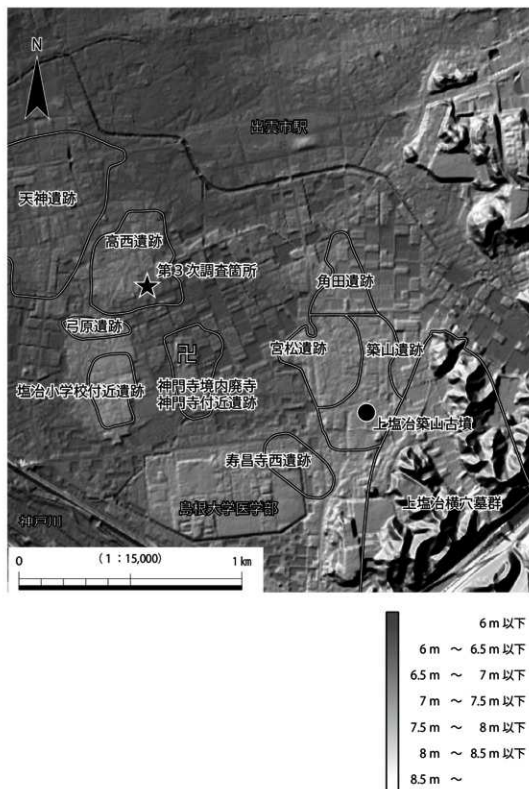
溝 SD3001 の出土遺物をみると、上・中・下層は、出雲国府6型式（9世紀中葉から後葉）から8型式（10世紀後半から11世紀前半）の土師器（坏や足高台坏）、須恵器の坏も含むことから、平安時代が一つの活動時期となっている。また、最下層は4層に分層しているが、最下層4層から須恵器のほか、弥生土器も含まれている。埋没時期については、須恵器の出土から8世紀代となろうが、弥生土器の中期以降の土器も多量に含まれている。破片も大きく、摩滅していないことから、周辺に存在した弥生時代の遺構や遺物包含層が削平された折に混入したのであろう。

試掘調査06トレンチにおいても溝の一部が確認されており、溝 SD3001 から北側に約35mは直線的に溝が掘られていると考えられる。周辺の標高と比較すると調査区から北西に向かって高くなる微高地に遺跡は立地しているが、その地形の縁辺に、直線的に人工的な溝が掘られている。これは集落などを区画する大溝であろうか（第3図）。

最下層に達する大溝構築時、8世紀代に高岸郷周辺で大規模な改変が行われたのであろう。

第2節 土坑 SK3005 出土の刻書土器について

調査区2区南西部にある土坑 SK3005 上層より出土した土師器（足高台坏）1点の底部にヘラ状工具による刻書を確認した。字体を確認し、「有興」と判読した。本遺跡調査所在地が出雲市塩冶町字有原であり、『出雲国風土記』（天平5年・733年）の神門郡条にある阿利神社が記載されていることから、地名の有原に関係するものと推定できる。また、正倉院文書の「出雲国大税賜給歴名帳」（天平11年・739年）に神門郡日置郷の桑市里の有臣姓の人物が確認できる桑市里は、現在の塩冶神社・上塩冶築山古墳あたりと考えられ、本遺跡から南東約1.0kmの距離である。このことから「有興」については、氏名である可能性もある（註1）。この土器の年代は、出雲国府6から8型式であり、歴年代は、国府6型式が9世紀中葉から後葉、8型式が10世紀後半から11世紀前半の年代であり、平安時代にあてはまる。平安期の塩冶地域を考察する上で貴重な発見となった。



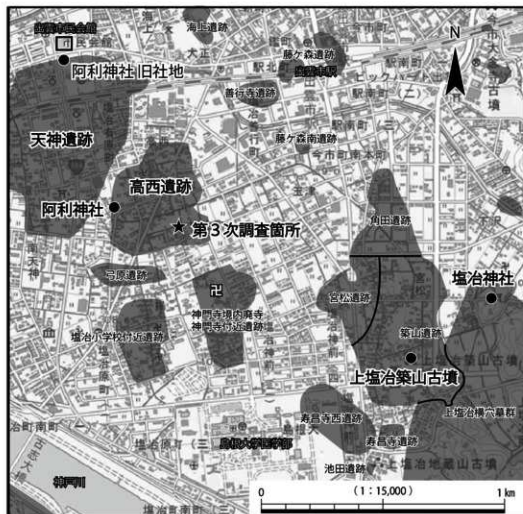
第 22 図 遺跡周辺の標高図

第3節 まとめ

今回の3次調査は、宅地造成地の市道拡幅部分のみの調査で、幅3.5m、面積300㎡と狭い調査区であったが、溝SD3001より多量の土器が出土したほか、土坑SK3005の埋土からは「有興」のへら描き文字の残る足高台杯が出土するなど奈良・平安時代を中心とした遺構や遺物が出土した。さらに、溝SD3001の最下層からは、須恵器とともに弥生土器もまとめて出土している。隣接する天神遺跡からは弥生土器が多数の調査地点で出土しており、高西遺跡から天神遺跡に続く標高約8mの微高地に弥生時代の集落があった可能性がある。

高西遺跡の1～3次の発掘調査はいずれも遺跡の南東縁辺部の調査である。今後、北東部の標高8mの微高地周辺（第22図・第23図）で遺跡の中心部が解明されることを期待したい。

註1 高橋周（出雲弥生の森博物館専門研究員）による。



第23図 遺跡周辺図

[illegible]

写真図版



2区 調査前の状況（東から）



1区 調査前の状況（北から）



1区 調査状況（北から）



2区 調査状況（東から）



2区 調査状況 2（東から）



2区 調査状況 3（北から）



SD3001 検出状況（南東から）



SD3001 掘削途中の状況（南東から）



SD3001 完掘状況 (南東から)



SK3002 完掘状況 (北から・東壁)



SE3003 調査中（北西から）



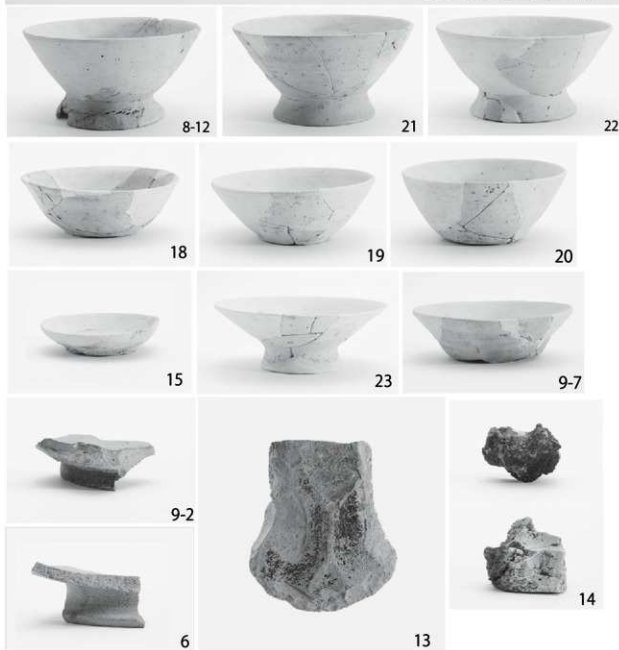
SD3004 調査中（北から）



SK3005 完掘状況（南から）

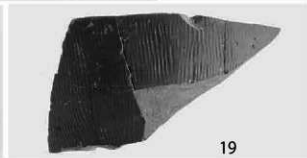


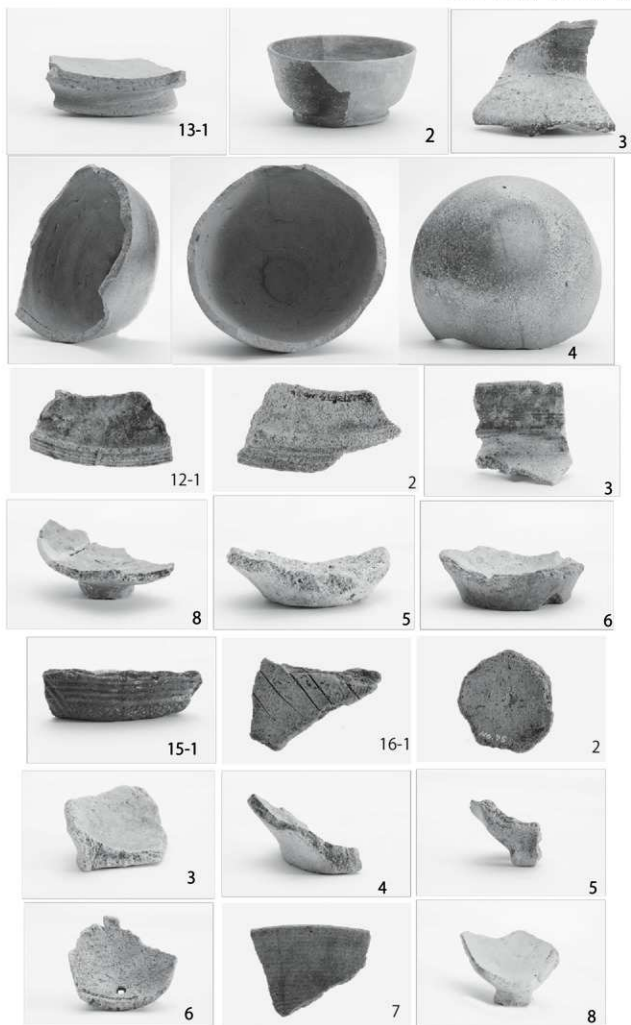
発掘調査の状況（南西から）



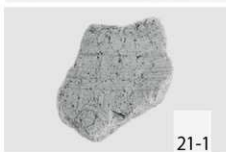
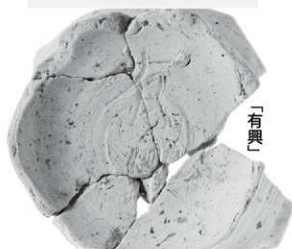


最下層出土須惠器









報告書抄録

ふりがな	たかにしいせきさん							
書 名	高西遺跡Ⅲ							
副書名	第3次調査発掘調査報告書							
シリーズ名	出雲市の文化財報告							
シリーズ番号	59							
編著者名	石原聡							
編集機関	出雲市市民文化部文化財課							
所在地	〒699-0011 鳥根県出雲市大津町 2760 TEL (0853) 21-6618							
発行年月日	令和7年(2025)3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北 緯	東 経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
たかにしいせき 高西遺跡	しまねけんいずもしるふんやちょう 鳥根県出雲市塩冶町	32203	W128	35° 22' 50"	132° 44' 50"	20240129 ～ 20240329	300 m ²	宅地分譲 地造成工事
所収遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構	主な遺物		特記事項	
高西遺跡	散布地	弥生時代～平安時代		溝・土坑 ・井戸	弥生土器・須恵器・土師器・ 石器・羽口			
要 約	宅地分譲地造成工事にともない出雲市塩冶町の高西遺跡を発掘調査した。調査地点は遺跡の南西部であったが、300 m ² の調査範囲に溝2条、土坑2基、井戸1基を確認しており、過去の当地における人の活発な活動を伺うことができる。遺物の多くは弥生時代中期から後期の土器、古墳時代から平安時代土師器や須恵器である。							
	溝 SD3001 より多量の土器が出土したほか、土坑 SK3005 の埋土からは「有興」のへら描き文字の残る足高台土が出土するなど奈良・平安時代を中心とした遺構や遺物が出土した。							

出雲市の文化財報告書 59

高西遺跡Ⅲ

第3次調査発掘調査報告書

令和7年(2025)3月

編 集	出雲市市民文化部文化財課 〒693-0011 島根県出雲市大津町 2760 T E L (0853) 21-6618
発 行	出雲市教育委員会 〒693-8530 島根県出雲市今市町 70 T E L (0853) 21-6874

印刷・製本 有限会社 福岡秀文堂